

7/6 Sat.

第218回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール 14時開演
SATURDAY MATINÉE SERIES No. 218 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

7/7 Sun.

第218回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール 14時開演
SUNDAY MATINÉE SERIES No. 218 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

指揮
Special Guest Conductor
クラリネット
Clarinet
コンサートマスター
Concertmaster

小林研一郎 (特別客演指揮者) -p.6
KEN-ICHIRO KOBAYASHI

アンドレアス・オッテンザマー -p.9
ANDREAS OTTENSAMER

小森谷巧
TAKUMI KOMORIYA

ウェーバー
WEBER

歌劇〈魔弾の射手〉序曲 [約10分] -p.11
"Der Freischütz" Overture

ウェーバー
WEBER

クラリネット協奏曲 第1番
へ短調 作品73 [約18分] -p.12
Clarinet Concerto No. 1 in F minor, op. 73
I. Allegro
II. Adagio ma non troppo
III. Rondo : Allegretto

[休憩]
[Intermission]

ドヴォルザーク
DVOŘÁK

交響曲 第8番 ト長調 作品88 [約37分] -p.13
Symphony No. 8 in G major, op. 88
I. Allegro con brio
II. Adagio
III. Allegretto grazioso
IV. Allegro ma non troppo

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
共催：東京芸術劇場（公益財団法人東京都歴史文化財団）
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）
独立行政法人日本芸術文化振興会

7/11 Thu.

第590回 定期演奏会
サントリーホール 19時開演
SUBSCRIPTION CONCERT No. 590 / Suntory Hall 19:00

指揮
Conductor
ピアノ
Piano
コンサートマスター
Concertmaster

ヘンリック・ナナシ -p.7
HENRIK NÁNÁSI

リュカ・ドゥバルグ -p.9
LUCAS DEBARGUE
長原 幸太
KOTA NAGAHARA

コダーイ
KODÁLY

ガランタ舞曲 [約16分] -p.14
Dances of Galánta

サン＝サーンス
SAINT-SAËNS

ピアノ協奏曲 第5番 へ長調 作品103
〈エジプト風〉 [約29分] -p.15
Piano Concerto No. 5 in F major, op. 103 "Égyptique"
I. Allegro animato
II. Andante
III. Molto allegro

[休憩]
[Intermission]

バルトーク
BARTÓK

管弦楽のための協奏曲 [約36分] -p.16
Concerto for Orchestra
I. Introduzione
II. Giuoco delle coppie
III. Elegia
IV. Intermezzo interrotto
V. Finale

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）
独立行政法人日本芸術文化振興会
協力：アフラック

7/12 Fri.

第22回 読響アンサンブル・シリーズ
よみうり大手町ホール 19時30分開演 (19時00分から解説)
Yomikyo Ensemble Series, No.22 / Yomiuri Otemachi Hall 19:30 (Pre-concert talk from 19:00)

※出演者と曲目のみ掲載しています。曲目解説は当日別紙を配布予定です。

《鈴木康浩プロデュースの室内楽》

ヴィオラ
Viola
ヴァイオリン
Violin
チェロ
Cello
ナビゲーター
Navigator

鈴木康浩 (読響ソロ・ヴィオラ)、正田響子

YASUHIRO SUZUKI (YNSO Solo Viola), KYOKO SHODA

長原幸太 (読響コンサートマスター)、外園彩香

KOTA NAGAHARA (YNSO Concertmaster), AYAKA HOKAZONO

富岡廉太郎 (読響首席)

RENTARO TOMIOKA (YNSO Principal)

鈴木美潮 (読売新聞東京本社 社長直属教育ネットワーク事務局専門委員)

MISHIO SUZUKI

ルクレール
LECLAIR

2つのヴィオラのためのソナタ 第4番

二長調 作品12-4 [約15分]

Sonata for 2 Violas No. 4 in D major, op. 12-4

I. Andante

II. Allegro moderato

III. Largo

IV. Vivace

ヒンデミット
HINDEMITH

弦楽三重奏曲 第2番 [約23分]

String Trio No. 2

I. Mäßig schnell

II. Lebhaft

III. Langsam

[休憩]

[Intermission]

ブラームス
BRAHMS

弦楽五重奏曲 第2番 ト長調 作品111 [約30分]

String Quintet No. 2 in G major, op. 111

I. Allegro non troppo, ma con brio

II. Adagio

III. Un poco allegretto

IV. Vivace ma non troppo presto

7/15 Mon.
holiday

第113回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ

横浜みなとみらいホール 14時開演

Yokohama Minato Mirai Holiday Popular Series, No. 113 / Yokohama Minato Mirai Hall 14:00

7/16 Tue.

第624回 名曲シリーズ

サントリーホール 19時開演

POPULAR SERIES No. 624 / Suntory Hall 19:00

7/17 Wed.

非破壊検査 Presents 第23回 大阪定期演奏会

フェスティバルホール 19時開演

Subscription Concert in Osaka, No.23, presented by Non-Destructive Inspection Co., Ltd / Festival Hall 19:00

指揮
Conductor

ブラムウェル・トーヴェイ -p.8

BRAMWELL TOVEY

ピアノ
Piano

リュカ・ドゥバルグ -p.9

LUCAS DEBARGUE

女声合唱
Women's Chorus

昭和音楽大学 -p.10

Showa University of Music

合唱指揮
Chorusmaster

山館冬樹 -p.10

FUYUKI YAMADATE

コンサートマスター
Concertmaster

小森谷巧

TAKUMI KOMORIYA

ラフマニノフ

RACHMANINOFF

ピアノ協奏曲 第2番 八短調 作品18 [約33分] -p.18

Piano Concerto No. 2 in C minor, op. 18

I. Moderato

II. Adagio sostenuto

III. Allegro scherzando

[休憩]

[Intermission]

ホルスト

HOLST

組曲〈惑星〉作品32 [約51分] -p.19

The Planets, op. 32

I. 火星、戦争をもたらす者

II. 金星、平和をもたらす者

III. 水星、翼のある使者

IV. 木星、快楽をもたらす者

V. 土星、老いをもちらす者

VI. 天王星、魔術師

VII. 海王星、神秘主義者

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

特別協賛：非破壊検査株式会社 (7/17)

助成：文化庁文化芸術振興費補助金 (舞台芸術創造活動活性化事業)

文芸春秋 独立行政法人日本芸術文化振興会 (7/15、16)

協力：横浜みなとみらいホール (7/15)、コジマ・コンサートマネジメント (7/17)

後援：横浜アーツフェスティバル実行委員会 (横浜音祭り2019パートナー事業) (7/15)

7/6

土曜マチネー

7/7

日曜マチネー

Maestro

指揮

小林研一郎

(特別客演指揮者)

KEN-ICHIRO KOBAYASHI, Special Guest Conductor

情熱のタクトが描く 入魂のドヴォルザーク



©読響

熱い音楽作りで絶大な人気を誇る“炎のマエストロ”が登場。得意のドヴォルザークを振り、会場を熱狂へと誘う。熟達のタクトが生み出す、情熱のサウンドに身を委ねたい。

1940年福島県いわき市出身。東京芸術大学作曲科および指揮科の両科を卒業。74年第1回ブダペスト国際指揮者コンクール第1位、特別賞を受賞。これまでハンガリー国立響の音楽総監督をはじめ、チェコ・フィル常任客演指揮者、日本フィル音楽監督など国内外の数々のオーケストラのポジションを歴任している。2002年5月の「ブラハの春音楽祭」オープニング・コンサートの指揮者に東洋人として初めて起用され、〈我が祖国〉全曲をチェコ・フィルと演奏して絶賛された。ハンガリー政府よりリスト記念勲章、ハンガリー文化勲章、民間人最高位の“星付中十字勲章”、ハンガリー文化大使の称号を授与された。11年、文化庁長官表彰受賞。13年、旭日中綬章を受章。

現在、日本フィル桂冠名誉指揮者、ハンガリー国立フィルおよび名古屋フィルの桂冠指揮者、群馬響ミュージック・アドバイザー、九州響名誉客演指揮者、東京芸術大学、東京音楽大学およびリスト音楽院（ハンガリー）名誉教授の任にあるほか、東京文化会館音楽監督、長野県芸術監督団の音楽監督を務めている。

録音の分野では、14年4月から読響と取り組んだブラームスの交響曲全集が好評を博している。

指揮

ヘンリク・ナナシ

HENRIK NÁNÁSI, Conductor

ハンガリーの俊英 注目のバルトーク



©Gunnar Geller

今年1月、バルトーク〈青ひげ公の城〉を振ってメトロポリタン歌劇場にデビューを果たして成功を収めるなど、欧米で注目を浴びるハンガリーの俊英。当初は2018年3月に読響との初共演を予定していたが急病で叶わず、1年4か月の延期となった。お国もののプログラムでの鮮烈な日本デビューに期待したい。

1975年ハンガリー生まれ。バルトーク音楽院でピアノと作曲を学んだ後、ウィーン国立音楽大学で学んだ。英国ロイヤル・オペラでA. パッパーノらのアシスタントを務める傍ら、ピアニストや歌曲伴奏で活躍。2009年フランクフルト歌劇場で〈ラ・ボエーム〉、10年にドレスデン国立歌劇場で〈アルジェのイタリア女〉を振ったのが評判となった。

12年から17年までベルリン・コーミッシェ・オーパーの音楽総監督を務め、演出家コスキーらと〈魔笛〉〈ルサルカ〉など数々の名舞台を作り、同劇場は13年に『オーパンヴェルト』誌で年間最優秀歌劇場に選ばれ、15年には国際オペラ・アワードの「年間最優秀オペラ・カンパニー賞」を受賞するなど高い評価を得た。パリ・オペラ座、バイエルン国立歌劇場、英国ロイヤル・オペラ、ハンブルク国立歌劇場、ドレスデン国立歌劇場、チューリヒ歌劇場、フランクフルト歌劇場、バルセロナ・リセウ大劇場などで活躍。ウィーン放送響、リンツ・ブルックナー管、フィレンツェ五月祭管、アトランタ響、ヴェネツィア・フェニーチェ歌劇場管などにも登場し、好評を博している。今後もサンフランシスコ・オペラ〈フィガロの結婚〉やバイエルン国立歌劇場〈エフゲニー・オネーギン〉への出演が予定されている。

7/11

定期

Maestro

7/15
みなとみらい

指揮

ブラムウェル・トーヴェイ

BRAMWELL TOVEY, Conductor



©David Cooper

北米の巨匠が振る 壮大な〈惑星〉

北米を中心に国際的に活躍する巨匠が読響初登場。“最も多才でカリスマ性あふれる音楽家の一人”と評される確かな実力の持ち主。最近ではYouTubeでライトセーバーを持ち、〈スター・ウォーズ〉を振る動画でも話題を呼んだ。円熟のタクトが聴かせる、壮大な〈惑星〉が楽しみだ。

1953年ロンドン生まれ。英国王立音楽院でピアノと作曲を学び、在学中から指揮者やチューバ奏者としても活躍。パーンスタインの推薦でロンドン響を指揮して国際的デビューを飾った。カナダのウィニペグ響の音楽監督を経て、2002年にはルクセンブルク・フィルの音楽監督に就任。世界各地での公演やルクセンブルクの新ホール完成記念公演などで注目を集めた。00年からはバンクーバー響の音楽監督を18年間務め、冬季オリンピックにおける招待演奏や音楽祭の創設などを成功へ導いた。ロサンゼルス・フィルの首席客演指揮者を経て、現在はBBCコンサート管の首席指揮者、バンクーバー響の名誉音楽監督などの任にある。

最近ではニューヨーク・フィル、シカゴ響、フィラデルフィア管、クリーヴランド管、フィルハーモニア管、モンテリオール響、シドニー響などと共演。特にニューヨーク・フィルには200回に迫る客演を重ね、ボストン響での定期公演は年間演奏会大賞に輝くなど高い評価を得ている。今年1月にもシカゴ響に客演し、好評を博した。

米グラミー賞やカナダの権威あるジュノー賞など受賞多数。ピアニスト、作曲家としても活動している。

7/16
名曲

7/17
大阪定期

Maestro



©Katja Ruge/Decca

クラリネット

アンドレアス・ オッテンザマー

ANDREAS OTTENSAMER,
Clarinet

「真の天才現る」と世界を驚かせるフランスの鬼才が読響に初登場。1990年生まれ。11歳でピアノを学び始めたが、一度ピアノから離れ、パリ第7大学で理学および文学の学士号を取得。その後、再びピアノの道を選び、パリのエコール・ノルマル音楽院などで学び、2015年に学士号を取得。14年アリエヴァ国際コンクール優勝。15年チャイコフスキー国際コンクールでは優勝候補の筆頭と目されながら、結果は第4位入賞。しかし、モスクワ音楽批評家協会特別賞をただ一人受賞し、多くの称賛を集めた。今や世界各地の著名な会場でリサイタルを行い、ゲルギエフやフェドセーエフ、クレメールら巨匠と共演している。ソニー・クラシカルと専属契約して3枚のCDをリリース。文学、絵画、映画やジャズにも情熱を持ち、自身で作曲も行っている。

甘い音色と完璧なテクニックで聴衆を魅了する世界的名手。1989年生まれ。10歳からウィーン国立音楽大学にてチェロを学んだ後、2003年からクラリネットに転向。09年、米国ハーバード大学在学中、ベルリン・フィル・アカデミーに入る。ベルリン・ドイツ響首席奏者を経て、11年弱冠21歳にしてベルリン・フィル首席奏者に就任。ソリストとして、ヤンソンス、ラトル、ネルソンスらの指揮で、ベルリン・フィル、ウィーン・フィルなどと共演。室内楽では、ユジャ・ワン、ペライア、アンスネス、ヨーヨー・マらと共演し、アンサンブル・ウィーン=ベルリンのメンバーとしても活躍。スイスのビュルゲンシュトック音楽祭の芸術監督も務めている。録音はドイツ・グラモフォンやデッカからリリースし、15年エコー・クラシック賞を受賞。今回が読響初登場。



©Bernard Bonnefon

ピアノ

リュカ・ドゥバルグ

LUCAS DEBARGUE, Piano

7/6
土曜マチネー

7/7
日曜マチネー

Artist

7/11
定期

7/15
みなとみらい

7/16
名曲

7/17
大阪定期

7/15
みなとみらい

7/16
名曲

7/17
大阪定期

Artist



女声合唱
昭和音楽大学
Showa University of Music,
Women's Chorus

昭和音楽大学および同短期大学部の声楽専攻生を主体に編成された合唱団。山館冬樹(教授)の指導の下で、同大学恒例のオペラ公演をはじめ、〈メサイア〉〈第九〉など幅広い演奏活動を行っている。これまでに東急ジルベスターコンサート、MUZAジルベスターコンサート、国立競技場ファイナルセレモニーなどに参加。近年はBS-TBS「日本名曲アルバム」に出演を重ねており、好評を博している。よく磨き上げられたアンサンブルには定評があり、2018年10月、東京芸術劇場主催の井上道義指揮、読響によるマーラーの交響曲第8番〈千人の交響曲〉では、首都圏音楽大学合同コーラスの中で大きく貢献し、高く評価された。

練習ピアニスト：松原裕子(講師)

東京声専音楽学校(現：昭和音楽大学)オペラ研究科修了。藤原歌劇団、日本オペラ協会、新国立劇場などで副指揮者、合唱指揮者を務めながらオペラ指揮者としての研鑽を積む。これまでに〈道化師〉〈椿姫〉〈蝶々夫人〉〈愛の妙薬〉などを指揮。2012年ニューヨーク・カーネギーホールでの「東日本大震災復興支援チャリティーコンサート」では記念合唱団の指揮を務めた。日本オペラ振興会オペラ歌手育成部講師、昭和音楽大学教授。



合唱指揮
山館冬樹
FUYUKI YAMADATE,
Chorusmaster

ウェーバー 歌劇〈魔弾の射手〉序曲

魔弾、すなわち魔法の弾。悪魔の力が宿ったこの弾を使って撃てば百発百中、だれでも射撃の名手になれる……と思わせておいて、実はこの魔弾、7発のうち6発は意のままになるが、残りの1発は悪魔が望んだところに命中するという恐ろしいもの。悪魔の力を借りて、ただで済むはずがない。

ドイツの作曲家カール・マリア・フォン・ウェーバー(1786~1826)は、魔弾の射手の伝説が記された民話集『幽霊物語』に魅了され、これをオペラに仕立てようと考えた。台本作家はフリードリヒ・キント。舞台となるのは森だ。主人公の若い狩人マックスは、射撃大会を前に調子を落としている。マックスはこの大会で勝てば、森林保護官の娘である恋人アガーテとの結婚が認められる。どうしても勝たなければならないマックスは、友人カスパールの力を借りて魔弾を手に入れる。カスパールは悪魔に魂を売っていたのだ。射撃大会当日、マックスは魔弾を次々と命中させ、最後の1発で鳩を狙う。魔弾はアガーテを襲うが、森の隠者の聖なる力がアガーテを守り、代わりに魔弾はカスパールの命を奪う……。初演はセンセーショナルな成功を収め、ドイツ語で書かれたロマン派オペラの先駆的な傑作として不動の人気を獲得することになった。

この序曲にはオペラ本編に用いられる印象的なメロディが次々と登場し、さながら全編の縮小版のような音のドラマがくりひろげられる。鬱蒼とした森を思わせるようなゆったりした序奏に続いて、ホルンがのびやかな四重奏を奏でる。チェロの旋律が不気味な気配を漂わせた後、活発な主部へと移る。エネルギーに高潮した後、力強いホルンに導かれて、クラリネットが可憐な主題を奏でる。弦楽器の流麗な主題が現れ、善と悪の対決を思わせる緊迫感あふれる楽想が続く。最後は強奏による輝かしいコーダによって、正義の勝利を予告する。

(飯尾洋一 音楽ライター)

作曲：1817~20年(歌劇)／初演：1821年6月18日、シャウシュピールハウス、ベルリン／
演奏時間：約10分
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部

7/6
土曜マチネー

7/7
日曜マチネー

Program Notes

7/6

土曜マチネー

7/7

日曜マチネー

Program Notes

ウェーバー

クラリネット協奏曲 第1番 へ短調 作品73

作曲家と当代一流の名手との出会いは、しばしば傑作協奏曲を生み出すもの。1811年、ウェーバーはクラリネット奏者ハインリッヒ・ベールマンに出会う。ベールマンはミュンヘンの宮廷楽団に務めるかたわら、ソリストとしてヨーロッパ各地を巡って称賛を受ける名奏者であった。当時、クラリネットはまだ歴史の浅い楽器だったが、ベールマンは10のキーを備えた最新の楽器を操って、なめらかで華麗な演奏を披露したという。

演奏旅行をきっかけにベールマンと知り合ったウェーバーは、さっそく新作の依頼を受けて、まずはクラリネット小協奏曲を作曲する。ミュンヘンでこの小協奏曲が初演された際、臨席したバイエルン王マクシミリアンはベールマンの妙技に感嘆し、即座にウェーバーに2曲の協奏曲を作曲するように求めた。こうして書き上げられたのがクラリネット協奏曲第1番へ短調および第2番変ホ長調である。ウェーバーはミュンヘンの宮廷楽団のメンバーからも続々と新作協奏曲を書いてほしいと依頼を受けたが、これに対してはファゴット協奏曲を書くにとどまった。ミュンヘンでは十分な音楽的成果を得たものの、以後、ウェーバーの情熱はもっぱらオペラ分野に注がれることになる。

第1楽章 アレグロ 付点リズムが特徴的な管弦楽の決然とした導入に続いて、クラリネットが憂いを帯びた主題を奏でる。独奏クラリネットが技巧的なパッセージを次々とくりだし、最後は消え入るように楽章を閉じる。

第2楽章 アダージョ・マ・ノン・トロポ 夢見るような主題で開始される。ここでの独奏クラリネットはあたかもオペラのプリマドンナのよう。

第3楽章 ロンド、アレグレット 軽快でチャーミングなロンド。開放的な気分にあふれ、独奏クラリネットが自由自在に駆け巡る。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1811年／初演：1811年6月13日、ミュンヘン／演奏時間：約18分
楽器編成／フルート2、オーボエ2、ファゴット2、ホルン3、トランペット2、ティンパニ、弦五部、クラリネット独奏

ドヴォルザーク

交響曲 第8番 ト長調 作品88

「あいつがゴミ箱に捨てたスケッチだけでも一曲書けそうだ」とは、アントニン・ドヴォルザーク(1841～1904)の卓越したメロディメーカーぶりを称えたブラームスの言葉。ブラームスはいち早くドヴォルザークの才能を認め、ベルリンの出版業者ジムロックに対してドヴォルザークを推薦した。おかげでドヴォルザークは〈スラヴ舞曲集〉で大きな成功を収め、名声をヨーロッパに広めることになる。以来、ジムロックはドヴォルザークと協力関係を続け、作品の出版に尽力した。

ところが、次第に両者の関係に溝が生まれてしまう。売れ行きのよい小品や歌曲を求めるジムロックと、交響曲のような大作に創作のエネルギーを注ぎ込みたいドヴォルザーク。交響曲第7番は〈スラヴ舞曲集〉の続編を書くことを条件にかるうじて出版できたが、いよいよ交響曲第8番で両者の思惑は平行線をたどる。「大規模な作品は売れない」と不十分な報酬しか提示できなかったジムロックに対して、すでに作曲家として自信を深めていたドヴォルザークはついに首を縦に振らなかった。売れ筋商品を求める出版社と芸術的な高みを目指す創作者という両者の立場の違いは、なんら現代の事情と変わるものではない。結局、交響曲第8番はイギリスのノヴェロ社から出版されることとなった。かつてこの曲が「イギリス」の愛称で呼ばれていたのは、このような出版事情を反映している。

第1楽章 アレグロ・コン・ブリオ 哀愁を帯びたチェロの主題で開始される。フルートが楽しい主題を奏で、熱気に満ちた楽想が展開される。

第2楽章 アダージョ 柔和でひなびた緩徐楽章。木管楽器のかんじょ小鳥がさえずる。

第3楽章 アレグレット・グラツィオーソ メランコリックなワルツ。

第4楽章 アレグロ・マ・ノン・トロポ 楽天的なファンファーレで開始され、主題と変奏が続く。次々と表情を変えながら、力強いクライマックスを築く。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1889年／初演：1890年2月2日、プラハ／演奏時間：約37分
楽器編成／フルート2(ピッコロ持替)、オーボエ2(イングリッシュ・ホルン持替)、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、弦五部

7/6

土曜マチネー

7/7

日曜マチネー

Program Notes

コダーイ ガラタ舞曲

ゾルターン・コダーイ (1882～1967) は、バルトークと同様に、ハンガリーの民謡を収集・研究するとともに自分の創作にも活かした、20世紀ハンガリーを代表する作曲家である。加えて、民謡の韻律法の研究で博士号を取得した民族音楽学者であり、ハンガリーの民謡や歌唱活動を重視した音楽教育法「コダーイ・メソッド」を確立した教育者としても広く活躍した。

〈ガラタ舞曲〉は、ブダペスト・フィルハーモニー協会の創立80周年記念のために委嘱され、1933年に作曲された。ガラタは、コダーイが少年時代を過ごしたハンガリー東北部の小さな町（現在はスロバキア領）の名前で、古くからロマ（中東欧に居住する移動型民族）の楽師たちが活動し、彼らが演奏した舞曲を集めた楽譜も出版されていた。コダーイは、その曲集の旋律を再構成し、豊かな響きを作り出すオーケストレーションを施し、18世紀の新兵募集の舞踊に由来する「ヴェルブンコシュ」のスタイルに倣^{なら}って、緩やかな音楽と速い音楽が交互に現れる作品に仕上げた。

ゆっくりとした導入部（レント、2/4拍子）はチェロの複付点のリズムが際立つ旋律で始まる。付点音型はロマの音楽の特徴で、次第に力を増していき、クラリネットのカデンツァで締めくくられる。主部（アンダンテ・マエストーソ、4/4拍子）は、そのままクラリネットが、哀愁を帯びた主題を奏でる。この主題は変化しながら繰り返されるが、その間に2拍子の軽快なテンポのエピソードを二つはさむ。後半（アレグロ、2/4拍子）は、ロマの音楽の、いわゆる速弾きの部分で、シンコペーションのリズムが長く続く旋律が弦楽器に現れる。途中でクラリネットが悠々と旋律を奏でるやや遅い部分をはさみ、勢いよく盛り上がるが、突然その流れが断ち切られる。弱音でフルート、オーボエとつないで、クラリネットのカデンツァが現れた後、再び軽快なテンポとなり、力強く結ばれる。

〈柴辻純子 音楽評論家〉

作曲：1933年／初演：1933年10月23日、ブダペスト／演奏時間：約16分
楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、ティンパニ、打楽器（グロッケンシュピール、小太鼓、トライアングル）、弦五部

サン＝サーンス ピアノ協奏曲 第5番 へ長調 作品103 〈エジプト風〉

フランスの作曲家カミーユ・サン＝サーンス (1835～1921) は、幼少期から音楽の才能を発揮し、1846年にわずか10歳でパリのサル・プレイエルにピアニストとしてデビューした。その後、パリ音楽院で学び、マドレーヌ寺院のオルガニストを長らく務めた。多数のピアノ曲を書いたが、ピアノ協奏曲は5曲（初期3曲、中期1曲、後期1曲）。いずれも作曲者自身のピアノ独奏で初演された。

サン＝サーンスの人生の後半は波乱に満ちていた。家庭内の不幸が重なり、妻と別居、設立に尽力した国民音楽協会を1886年に脱退、さらに母親の死が続いた。89年にパリの自宅を引き払い、北アフリカ中心の放浪生活を送るなど、1904年まで各地を転々とした。そのなかでアフリカの地は彼の孤独な心を癒してくれたようで、〈アフリカ幻想曲〉(1891)に続き、ピアノ協奏曲第5番もエジプト滞在中に作曲された。〈エジプト風〉と副題にあるが、とりわけ第2楽章で異国趣味が鮮やかに表現される。初演は、1896年にデビューと同じサル・プレイエルで開かれたサン＝サーンスの演奏活動50周年を記念する演奏会で行われた。

第1楽章 アレグロ・アニマート、へ長調、3/4拍子 管弦楽に導かれ、独奏ピアノが第1主題を密やかに奏でる。細やかなパッセージに彩られ、哀愁を帯びた第2主題（二短調）は、波打つように広がる。

第2楽章 アンダンテ、二短調、3/4拍子 シンコペーションの力強いリズムと独奏ピアノが戯れる導入に続いて、独奏ピアノがエキゾチックな主題を奏でる。テンポの速い2拍子の中間部（ト長調）の素朴な温かい旋律を経て、5音音階風の旋律とアジアの打楽器の音色を思わせる楽想をはさみ、主部が戻る。

第3楽章 モルト・アレグロ、へ長調、2/4拍子 ティンパニを伴った律動的な導入の後、独奏ピアノの華やかな第1主題が示され、悠々とした第2主題（ト長調）と軽やかな結尾主題とともに展開される。

〈柴辻純子 音楽評論家〉

作曲：1896年／初演：1896年6月2日、パリ／演奏時間：約29分
楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、打楽器（銅鑼）、弦五部、独奏ピアノ

バルトーク 管弦楽のための協奏曲

ベーラ・バルトーク (1881~1945) は、1940年にアメリカに渡った。前年にナチス・ドイツがチェコ、続いてポーランドを侵略。バルトークはユダヤ系ではなかったが、^{しゅんじゅん}逡巡の末、祖国ハンガリーにも危険な状況がおとずれると判断して移住を決意した。アメリカでの最初の3年間は、大学等で作曲を教えることを勧められても関心を示さず、作曲の依頼も受けることなく、スラヴの民俗音楽の研究に専念した。そのため伝記等ではアメリカ時代は経済的に困窮していたと記されるが、実際は著作権料等の収入があり、最晩年には様々な委嘱も受けた。

1943年2月、バルトークはハーバード大学での連続講義の3回目を終えた後、体調不良のため入院する。検査の結果、白血病の診断を受けるが、本人に病名が告知されることはなかった。入院生活を送るある日、一通の手紙を受け取った。それは、ロシア生まれのアメリカの指揮者セルゲイ・クーセヴィツキー (1874~1951) からで、翌年の自身の生誕70年と、ボストン交響楽団の指揮者就任20周年を記念する作品を依頼してきたのだ。バルトークは当初、健康状態の不安からその委嘱を断るつもりでいたが、クーセヴィツキーに説得され、引き受けることにした。

〈管弦楽のための協奏曲〉は、退院後、ニューヨーク北部のサラナク湖畔で療養しながら作曲が開始された。8月から2か月足らずで書き上げられ、独奏楽器を持たない協奏曲だが、各楽器に高度な演奏技術が盛り込まれ、無駄のない緻密な書法で完成度はきわめて高い。全体は5楽章構成で、バルトークは「第1楽章の凝固から、第3楽章の^{いんろう}陰鬱な死の歌を経て、終楽章の生の肯定へと至る」と記している。創作によって自らを奮い立たせるかのように、ベートーヴェン的な「苦悩から歓喜へ」と向かう大きな流れに、「おどけた調子の第2楽章」と語る比較的軽い内容の楽章などをはさみ、力強く表現力の高い作品となった。

第1楽章「序章」 アンダンテ・ノン・トロッポ〜アレグロ・ヴィヴァーチェ ゆるやかな序奏は低音弦楽器の完全4度音程の上下行で始まり (ハンガリー民謡の五音音階との関連も指摘される)、軽やかなフルートの旋律は第3楽章で変形されて用いられる。主部は、ヴァイオリンのぎっぴりとした第1主題とオーボエの静かな第

2主題が展開する。展開部の金管楽器のフガートも華やかである。

第2楽章「対の遊び」 アレグレット・スケルツァンド ドラムの導入に続いて、ファゴット、オーボエ、クラリネット、フルート、トランペットが2本一組で、それぞれ異なる音程関係で旋律を奏でる。金管楽器のコラール風の間奏部を経て、主部が再びファゴットから、今度は楽器が増加され、複雑になって戻ってくる。

第3楽章「エレジー」 アンダンテ・ノン・トロッポ 弱音で揺れ動く導入の後、三つの主題が並列される。落下する音型を伴う力強い主題は第1楽章の序奏に基づく。さらにルーマニアの葬送歌風の主題がヴィオラで歌われ、第1楽章の序奏と関連する主題が続き、導入に対応するコーダはピッコロの音色で結ばれる。

第4楽章「中断された間奏曲」 アレグレット オーボエから木管楽器に広がる変拍子の素朴な主題と、ヴィオラから始まる歌謡風の主題 (ハンガリーの流行歌に由来する) が交替する。そこに突然、クラリネットの大衆的な歌が入り、中断される。これは、当時頻りに演奏されていたショスタコーヴィチの交響曲第7番〈レニングラード〉(1941年)を^{いぶ}揶揄するものと、バルトークは語ったという。

第5楽章「終曲」 ベザンテ〜プレスト 強力なホルンの動機に導かれて、ロマの楽師たちの音楽に類似した無窮動風の主題が弦楽器に現れ、発展する。静かな第2主題に続いて、ハンガリーの「豚飼いの角笛」に由来する第3主題が、バグパイプの響きを思わせる伴奏のもと、トランペットに現れる。フーガで始まる展開部の後、各主題が再現され、生命の輝きが音楽に映し出されたかのように決然と結ばれる。

〈柴辻純子 音楽評論家〉

作曲：1943年／初演：1944年12月1日、ボストン／演奏時間：約36分
楽器編成／フルート3 (ピッコロ持替)、オーボエ3 (イングリッシュ・ホルン持替)、クラリネット3 (バスクラリネット持替)、ファゴット3 (コントラファゴット持替)、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器 (大太鼓、小太鼓、シンバル、トライアングル、サスペンデッド・シンバル、銅鑼)、ハープ2、弦五部

7/15

みなとみらい

7/16

名曲

7/17

大阪定期

Program Notes

ラフマニノフ

ピアノ協奏曲 第2番 八短調 作品18

モスクワ音楽院在学中からチャイコフスキーらに才能を認められ、モスクワ楽派と呼ばれるロシア・ロマン派音楽の流れを受け継いで、多くの作品を世に送り出したセルゲイ・ラフマニノフ(1873~1943)。作曲家であると同時にヴィルトゥオーゾ・ピアニスト、指揮者としても実績を残した彼にとって、ピアノ協奏曲というジャンルは自らの多彩な能力をフルに使える場だったのではないだろうか。

1890~91年、モスクワ音楽院の卒業試験作品としてピアノ協奏曲第1番を作曲したラフマニノフだったが(後に改訂)、約8年後に第2番を完成させるまでには大きなブレーキとなる出来事もあった。97年3月、自信を持って発表した交響曲第1番の初演が失敗に終わり、ショックを受けた彼は作曲活動から距離を置ってしまうのである。しかし、周囲の友人たちに励まされて徐々に立ち直った彼は、ロンドン・フィルハーモニック協会から期待を寄せられたことを機にピアノ協奏曲第2番の作曲へと向かう。復調の陰にはニコライ・ダーリという医師による精神的・心理的な治療があり、完成した作品はそのダーリに献呈された。

第1楽章 モデラート、八短調。ラフマニノフの音楽的刻印といえる教会の鐘の音を模した短い序奏(ピアノ)で幕を開け、弦楽による濃厚な第1主題、ピアノで提示される甘美な第2主題を軸に展開される。

第2楽章 アダージョ・ソステヌート、ホ長調。まどろむような曲調からフルートが第1主題を提示。第2主題は短調へと転じてピアノが提示する。

第3楽章 アレグロ・スケルツァンド、八短調。動きのある序奏に続き、ピアノが飛び跳ねるような音型の第1主題を提示。叙情的な第2主題は弦楽器で提示される。最後は二つの主題が重なり、壮大に全曲を閉じる。

〈オヤマダアツシ 音楽ライター〉

作曲：1900~01年/初演：1901年11月9日(ロシア旧暦では10月27日)、モスクワ/

演奏時間：約33分

楽器編成/フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器(大太鼓、シンバル)、弦五部、独奏ピアノ

ホルスト

組曲〈惑星〉 作品32

ブラックホールの存在解明など神秘的な側面がまだまだ多く、各国の探査・開発も含めて話題には事欠かない宇宙空間。およそ100年前、イギリスでグスターヴ・ホルスト(1874~1934)が大編成のオーケストラによる組曲〈惑星〉の作曲にいそんでいた時代も、やはり多くの人々を魅了していたであろう。一方で宇宙への憧れは古代より続く占星術と結びつき、惑星や星座をキャラクター化・視覚化するなどして親近感を生み出した。ホルストもまた、占星術に心を奪われていた一人である(一方では、インドの古典文学や哲学にも影響を受けていた)。

ホルストは本業(学校の音楽教師や教会のオルガニストなど)をもつ「日曜作曲家」であり、残された作品の多くは合唱曲や歌曲、1幕ものの短いオペラ、弦楽合奏曲、吹奏楽曲、さほど規模の大きくない管弦楽曲などで占められる。4管編成にパイプ・オルガンや女声合唱を加えた〈惑星〉は、彼の作品中でも珍しいほど大規模なスコアだといえるだろう。1910年代は、パリでセンセーションを巻き起こしたストラヴィンスキーのバレエ音楽などがイギリスでも評判を呼び、多彩な楽器の集合体である大編成のオーケストラが注目されていた時代である。〈惑星〉は大編成オーケストラに対するホルストの憧れを形にした大作だといえるかもしれない。実際、ホルストはそうした作品を意識し、特にシェーンベルクが「音響作曲法/音色旋律」という作曲技法を試したとされる〈5つの管弦楽曲〉(1912年、ロンドンで初演)に多大なる刺激を受けたという。

曲は1918年9月、ロンドンで非公開の全曲初演が行われ(エイドリアン・ポールト指揮)、バーミンガム等では抜粋という形で公開演奏。20年11月にロンドンで、アルバート・コーツの指揮により全曲の公開初演が行われた。しかし、この曲が現在のような世界的人気を獲得するのは60年代になってからだ。その後、第4曲“木星”の中間部で演奏されるメロディーがクラシックを超越したさまざまなジャンルで親しまれるようになり、多くの人たちがこの曲の存在を知ることになる。曲は全7曲から成り、それぞれにローマ神話からヒントが採られたシンボリックな題名が付けられている。

「火星、戦争をもたらす者」 5拍子という不安定なリズム、攻撃的な音響、迫り来

7/15

みなとみらい

7/16

名曲

7/17

大阪定期

Program Notes

7/15

みなとみらい

7/16

名曲

7/17

大阪定期

Program Notes

るようなリズム。作曲当時、第一次世界大戦によってイギリスは（結果的に勝利を収めたものの）大きな打撃を被った。この曲にその影響があることは否めないだろう。

「金星、平和をもたらす者」 美しいホルンの吹奏で幕を開ける楽園のような音楽。チェレスタの音色などを駆使した繊細なオーケストレーションが特徴。

「水星、翼のある使者」 『真夏の夜の夢』に登場する妖精パックを連想させるようなスケルツォ。

「木星、快楽をもたらす者」 豪快なホルンの吹奏による複数の主題や、力強いワルツを経て、弦楽器やホルンが慈愛に満ちた民謡調のメロディーを提示。その後、曲は冒頭の雰囲気に戻っていく。

「土星、老いをもたらす者」 不気味で神秘的な雰囲気の中、トロンボーンがコーラル（賛美歌）のような主題を演奏し、重厚な行進曲が始まる。世界が叫ぶような音楽を経て、神秘の世界へと帰っていく。

「天王星、魔術師」 ポール・デュカスによる交響詩〈魔法使いの弟子〉との関係性が指摘される、力強いスケルツォ。冒頭に金管楽器群が演奏する四つの音（モチーフ）が、全曲の軸となっている。

「海王星、神秘主義者」 死の世界を描写するような音楽であり、静けさの中に多彩かつ繊細な表情を見せる。後半には歌詞のない女声合唱が加わり、最後はその合唱を残して消え入るように曲を閉じる。

〈オヤマダアツシ 音楽ライター〉

作曲：1914～16年／初演（公開全曲初演）：1920年11月15日、ロンドン／演奏時間：約51分
楽器編成／フルート4（ピッコロ持替、アルトフルート持替）、オーボエ3（バリトンオーボエ持替）、イングリッシュ・ホルン、クラリネット3、バスクラリネット、ファゴット3、コントラファゴット、ホルン6、トランペット4、トロンボーン3、チューバ、テナーチューバ、ティンパニ2、ハープ2、チェレスタ、オルガン、打楽器（グロックンシュピール、シロフォン、銅鑼、鐘、小太鼓、タンブリン、大太鼓、トライアングル、シンバル）、弦五部